

令和3年度 校内主題研究

北九州市立高槻小学校

1. 研究主題

基礎・基本の定着を図り、自ら学び考える力を育てる算数科指導法の研究

～「話し合う」活動と「書く」活動の具現化～



< 研究の概要 >

《一年次》令和2年度

「話し合う活動や振り返る活動を継続しながら、書く活動の在り方を考える」



《二年次》令和3年度

「話し合う活動と書く活動の関連を位置付けた授業展開を構築する」



《三年次》令和4年度

「主体的・対話的で深い学びを実現する授業展開と評価の在り方を検証する」

2. 児童の実態

○ 単学級のため、友達関係が安定化されている面がある。

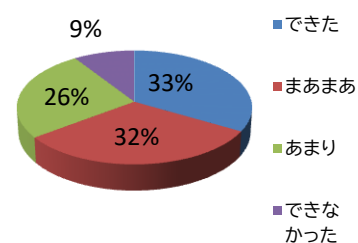
互いの長所を認め合い、短所を補い合おうとする思いやりのある集団づくりができています。

○

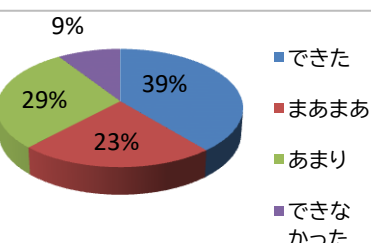
○

○ 児童アンケート(令和3年3月初め実施)によると、「進んで発表する」(グラフ①65%)、「積極的に話し合う活動をする」(グラフ②62%)で、過半数は授業に主体的に取り組んでいる。

グラフ①進んで発表する



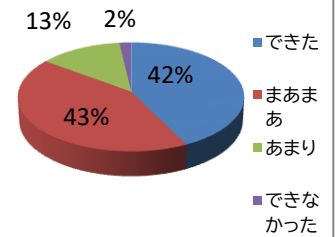
グラフ②積極的に話し合う活動をする



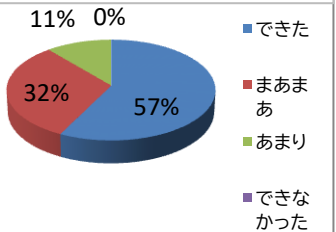
グラフ③の結果から、85%が「見通しをもって取り組む」ことができていると実感していることが分かる。グラフ④の結果から、90%の児童が「まとめ・ふり返りをきちんとする」ことができている。このように、授業における学習習慣は身に付いていると言える。

○

グラフ③見通しをもって取り組む



グラフ④まとめ・ふり返りをきちんとする



3. 本年度のスクールプランに示されているゴール

「授業では、めあて、まとめ、振り返る活動において自分の考えを書くことができていると思いますか」について肯定的な回答をした児童の割合・・・90%以上

「学校の授業などで、自分の考えを説明したり、話し合いをしたりすることができていると思いますか」について肯定的な回答をした児童の割合・・・80%以上

4. 研究仮説

算数科において、一単位時間の学習展開において、個への支援と集団思考場面の時間を確保し、「書く活動」と「話し合う活動」を意図的に位置付ければ、基礎・基本の定着を図り、自ら考える力を育てることができるであろう。

5. 具体的な取組 【高槻小学校スタンダード】 ～「話し合う」活動と「書く」活動の具現化に向けて～

今年度の校内主題研究において改善する内容として、「発問の精選」、「思考を深める教材研究」、「授業の流れの可視化」、「説明するための表現力」、「話し合い活動の定着」が挙げられる。

そこで、特に改善する内容と重点的な課題として、

総括的重点目標 具体から抽象への思考の切り替えさせ方について

→学習タイムテーブルの活用、発問の精選、話し合いの視点の明確化

① 限られた対話の中で、いかに練りあうか

→説明するための表現力、話し合い活動の定着

② 話し合い活動で、どの場面に重点を置くか

→思考を深めるための教材研究(準備)

が挙げられる。そこで、以下にこの3点について、「重点項目」として具体的に示す。

重点項目

総括的重点目標 具体から抽象への思考の切り替えさせ方

① 授業の流れの可視化を図るために、学習タイムテーブルで「今、どんな活動をしているのか」を視覚でとらえられるようにする。また、板書計画をする際、「めあて」から「まとめ」までを児童が見通しをもってとらえられるようにする。

② 「めあて」「まとめ」の言葉は、導入時の問題に対する答えを予想し、解き方の見通しを持たせる。そのため、これまでの学習を想起できるように、既習事項についての掲示物や前時(前単元)までのノート記録を活用する。予想した問題解決のためのキーワードをもとに、児童の考えでつくる。

(低学年)教師が誘導して

(中学年)子どもたちが考えを出し合う

(高学年)子どもたちがつくる(書く)

③ ノートづくりでは、書く項目の位置づけを明確にし、次時以降の学習で確かめられるようにする。

(1)問題や図等を貼り、児童の書く活動につなげる。

(2)学習の見通しを考えた使い方を指導する→ヒントカード、部分的なワークシート、

(3)教科書ノートの活用→ノート指導での児童の負担感軽減

(例)・ホワイトボード、ワークシート、タブレット端末等の利用。→出された意見に「いいね」等

④全体での「話し合い活動」の時間確保

「書く」ことにより、自分の考えをもつことができているので、その考えを「話す」「聞き合う」ことで、ペアや3人での練り合い場面を作れば、全体での話し合いで内容を深められる。

→ひな型(発表の話型)の作成

⑤ 「まとめ」「ふり返し」の場面では、「メタ認知」「自己評価」「意欲喚起」をねらいとして視点を統一する。

(1)「まとめ」では、「だれでも」「いつでも」「はやく」「かんたんに」「せいかくに」できる方法について、簡潔にまとめる。

(2)「ふり返し」の際には、以下の図1に示す視点に基づいて、「本時のねらい」に照らして行う。

低学年では、A「わかったこと」、B「できるようになったこと(何で、どんな方法で)」、C「楽しかったこと・次にしたいこと」を中心にふり返る。中学年では、A,B,Cに加えて、D「友達の説明で気づいたこと」を加えた4つの視点、高学年では、さらに E「わからなかったこと・本時の学習で見つけた新たな疑問点」を加えて5つの視点から、本時の学習をふり返るようにする。

図1

ふり返りの視点

A 今日わかったこと

B できるようになったこと(何で、どんな方法で)

C 楽しかったこと・次にしたいこと

D 友達の説明で気づいたこと

E わからなかったこと・疑問点

低学年

中学年

高学年

1

★書く活動を中心に、ノート指導において、「個人思考」「まとめ」「振り返り」を記述し、書いた内容についてノートの見せ合いやペア学習を行う。

○ 低学年では、問いに対する式・答えを書き、相手(ペア)に対して説明を考え、順序だてて話したり、具体的な操作をしながら話したりして、互いの共通点や相違点に着目させる。ペア学習を経て、全体では、意図を明確にして説明しながら、考えを練り合うようにする。

○ 高学年になると、「めあて」について、児童自身が「何のために」「何を」話し合うのかという明確な視点を持ち、対話によって「どんな方法で話し合うのか」を可視化し、問題解決に取り組む。肯定的な意思表示を促し、自尊感情や自己肯定感を高める。

(例)・ホワイトボード、ワークシート、カメラ等の利用。

・出された意見に「いいね」等

2 話し合い活動で、どの場面に重点を置くか

○ 教材研究の際に、単元の目標(ねらい)のどの観点を中心に、「本時」を組み立てるかを明らかにして計画を立てる。ねらいの到達(達成)に向けて、授業のどの場面で、何を中心に「話し合う」か、そのために、どんな発問をするかを研究、実践する。

○ 発問を精選し、児童の発言をつないで授業を展開していく。

○ 低学年では、「お話する」「うなずきながら聞く」の定着を目指す。

学年が上がるごとに、「相違点」や「類似点」に気づき、ホワイトボードに簡潔にまとめる。

さらに、ICT を活用して時間短縮したりして、話し合い活動を充実させる。